

令和3年度入学試験問題（学校推薦型選抜Ⅰ）A

# 小 論 文

（初等教育教員養成課程）

## 注意事項

1. 解答は、すべて別紙解答紙の指定の箇所に横書きで記入すること。
2. 解答紙には、必ず受験番号を記入すること。

# 令和3年度学校推薦型選抜Ⅰ 入学試験問題

## 問題訂正

初等教育教員養成課程（A）

◎科目名 小論文

---

1 ページ

本文 18 行目

(誤) 暗誦したり, . . .

(正) 暗<sup>しょう</sup>誦したり, . . .

〔問〕 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

みなさんは、この漢字をご存知でしょうか？

學

よく大学の名前などで使われている「学」の旧字体ですね。昔の人たちは、「学ぶ」ということをとても上手に表現してくれました。というのも……下半分はそのまま子どもです。子どもがどのような場で学ぶのかを上半分で表しているのです。上半分の真ん中にある二つのカタカナの「メ」のようなものは、人と人とが交わることを意味しています。

そして、この「メ」を囲むような両サイドは、大人の手です。つまり、子どもは大人の手を守られて（安心感を持って）、人と交わるような場でこそ学ぶのだという意味になります。そう考えると、最近ではアクティブラーニングや対話的な学びが大切だといわれていますが、もともと学ぶためにはアクティブ（能動的）で、人と人との対話や共同作業が必要だったことになります。決して新しい考え方でもやり方でもないというわけですね。

それでは、どうして覚えていまさらこのようなことが大切だといわれ始めているのでしょうか？ 1976年生まれの子が子どもだった頃、漢字や英単語を覚え、計算ができ、地図にある地名を覚え、何年に何が起きたのかを覚え、植物が育つ条件や昆虫の定義を覚えてきました。これらができるようになるためには、繰り返し書いたり、暗誦したり、類似した問題を解いたりしてきました。これらの作業は個人でできるため、ほかの誰かとの対話も共同作業も特に必要ではありませんでした。先ほどの旧字体の「學」でいえば、上半分の真ん中の「メ」のない学びになりがちだったというわけです。

いまの我が国の子どもたちはどうでしょうか？ 実際には大きく変わったとはいええないかもしれません。しかし、確実に私の時代の学び方ではこれからの時代に必要な力を身に付けられないだろうという考え方がされるようになってきました。もちろん、知識を覚えることもその知識を活用することも必要です。個人的な作業を通じて知識を得ることが不要になったわけではありません。ただ、それだけでは十分とはいえない

なくなってきたのです。そのため、これからは知識を身に付けているだけでは対応できない問題が、入学試験などででてくることでしょう（すでに出している中学校や高校、大学も増えてきています）。

例えば、歴史の教科書から名前が消えるかもしれないといわれている坂本龍馬。その坂本龍馬らの尽力によって、1866年に締結された薩長同盟に関する問題が出されるとしたら……。私たちの時代であれば、空欄へ「薩長同盟」と書けば正解になる問題がよく出されてきました。しかし、これからは「坂本龍馬たちは、どうして薩摩藩と長州藩を結び付けようとしたのでしょうか？そこにはどんな目的があったのでしょうか？」とか、「あなたが坂本龍馬だったら、犬猿の仲だった薩摩藩と長州藩を結び付けるためにまず何をしますか？」といった問題と向き合わなければならないかもしれません。もしそうだとすれば、個人作業によって知識を身に付けるだけでなく、その歴史の背景にも目を向けいろんな角度から調べてみたり、自分が坂本龍馬になったつもりで考えてみたり、それをほかの人たちと話し合ってみたりすることが求められます。授業での学び方も、入学試験の問題もこれからどんどん変わっていくことでしょう。いや、変わらなければならないでしょう。

さて、こうなってくると認知能力だけでなく、非認知能力も授業方法や試験問題で問われ始めていることがわかります。昔の人が教えてくれたような「学び」は、認知能力だけでなく非認知能力を高めることにもつながってくるというわけです。それでは、学校以外の場所ではどうでしょうか？学校以外でも私たちは学んでいるといえるのでしょうか？学習塾で……？宿題やそのほかの家庭学習で……？いやいや、学ぶというのはそんなに狭い話ではありません！たしかに、先ほどは学校での例を出してみましたが、私たちは自分自身の生活全体の中でたくさんの学びをしているはずなのです。この学びこそが、私たちの非認知能力を最も高めているのではないのでしょうか？これこそ自分自身の非認知能力の育ち方ですね。

それでは、非認知能力の育て方はどうでしょう。旧字体の「學」の上半分の両サイド！大人は子どもを守るだけでなく、子どもが学ぶための環境を提供することも役割の一つです。それは、学校の先生だけでなく、保護者だけでなく、子どもの生活全体にかかわるいろいろな大人たちによって提供されているわけです。

出典：中山芳一（2018）『学力テストでは測れない非認知能力が子どもを伸ばす』，  
東京書籍，pp.92-95.（設問の都合により本文の一部を改変している。）

（問1）下線部 a の「非認知能力」は，この文章の中でどのような力であると説明されていますか。25 字以上 50 字以内で書きなさい。

（問2）あなたが教師になったとき，「非認知能力」を始めとする「これからに必要な力」を，子どもたちが育むためには，どのようなことを心がけ，指導をおこないますか。300 字以上 400 字以内で述べなさい。

令和3年度入学試験問題（学校推薦型選抜Ⅰ）B

# 小 論 文

（初等教育教員養成課程）

## 注意事項

1. 解答は、すべて別紙解答紙の指定の箇所に横書きで記入すること
2. 解答紙には必ず受験番号を記入すること

〔1〕 つぎの文章を読み、あとの問いに答えなさい。

「教えること」が社会的な使命を帯びていることを、今、どうやったらもう一度とらえ直すことができるのか。教師の一人として、教えることの大切さをもう一度確かめたい。そう私が願うのは、私たちが直面する社会の困難な問題の多くが、知性によってしか解決できないことがわかってきたからである。

大村が中学校教師として再出発した頃とくらべて、豊かになった今の日本では、同世代のほとんどが高校まで進み、さらにおよそ四割が大学までの教育を受けられるようになった。短大や専門学校などの二年間の高等教育を含めれば、同世代の七割近くが20歳まで教育を受けるようになったわけだ。それだけ教えるための場や機会が増えているということだが、その反面、なぜ勉強するのか、理由がわからなくなった子どもたちを生み出していることになる。

高校入学から大学卒業まで、一人の子どもに平均1000万円近くかかる教育費を百数十万人いる同一年齢人口のうち約四割の50-60万人が享受できる。そういう豊かさを手に入れた社会だ。教育の潜在的な可能性は、戦後間もなくの頃とくらべものにならないほど大きい。機会や時間や資源の点では、世界中でトップレベルの基盤を持った教育制度を、私たちは手にしているのだ。これだけの教育資源を持った私たちは、学生たち生徒たちに何を教えた方がいいのか。教師として何を教えることができるのか。

戦後の日本社会の生き残りという課題よりもさらに困難な問題を、現在、私たちは地球的規模で抱えている。戦後の復興が、他の国々からの援助や支援によって可能であったことを思えば、今の日本の豊かさを使って、私たちがほかの国々にできることはたくさんある。教育という資源を使って何を教えたらいいのかわからなくなるほど、安穏とした時代に私たちは生きているのではないはずだ。食料や環境の問題から貧困や飢餓、民族間の対立の問題まで、取り組むべき問題は多岐にわたる。しかもどれ一つをとってみても、知的な格闘を通じてしか解決できない課題ばかりである。

科学者、技術者、政治家といった立場からの問題解決が求められるだけでない。 —

人ひとりの、市民として、生産者として、消費者としての知的な行動（educated action）が間接的な問題解決につながる。食料の安全や環境問題をとってみても、問題の広がりが日常生活の隅々にまで及んでいることがわかるだろう。そして、一部の知識人に問題解決を任せることができないほど、問題の広がり大きい。関わる人びとも多い。

それぞれの分野の専門家の間でも意見が分かれるような問題が少なくないなか、専門家の対立する意見のどちらを信じるか。どのような立場の研究者や専門家に、税金を使って、研究をしてもらうか。有権者として納税者としての判断によって、大勢が違ってくこともある。だからこそ、多少大げさにいえば、一人でも多くの子どもたちの知的な能力を高めることが、人類の生存にまで関わる問題解決に結びついている。とくに、これだけのエネルギーを消費し、さまざまな製品を開発・製造・輸出している日本にとって、その国民がどのような判断をするのかは、世界に大きな影響を及ぼしうる。

ただその関係が見えにくくなるほど、私たちは自分たちの豊かさに安住する余裕を与えられている。日本という社会を一步外に飛び出してみれば、こうした余裕が、ごく限られた地域と時代の偶然の産物にすぎないことがわかるのに、である。少なくとも知的な想像力を働かせることが仕事である教師ならば、自分たちの豊かさが何によって支えられているのかは見えているはずだ。子どもたちが豊かさに安住してこうした世界が見えなくなってしまうとしても、教師まで同じようになるわけにはいかない。自分たちと自分たちを取り巻く世界の関係を教師が見失えば、子どもはますます豊かさに安住するようになる。

教育の可能性と課題を、積極的にとらえ直していけば、今の日本の教師たちにも、教えることの社会的な使命が見つかるのかもしれない。答えはそれぞれの教師によって違うだろう。答えは多様であってもよい。とにかく、こうした社会的な使命感と結びつけて、教師自身が、今日もまた教室に立つことで具体的には何ができるのかを考えてみればよい。そこから、教えることのリアリズムが見えてくるのではないか。大村から私たちが学び取ることができるのは、使命感を単なる精神論にしないための教えることのリアリズムである。



(出典：大村はま／荻谷剛彦・夏子、『教えることの復権』2003年、筑摩書房)

pp. 216-219 (設問の都合により本文の一部を改変している)

(問1) 下線部「少なくとも知的な想像力を働かせることが仕事である教師ならば、自分たちの豊かさが何によって支えられているのかは見えているはずだ。」について、教師としての使命を文中の言葉を用いて60字以上80字以内で説明しなさい。

(問2) あなたは、将来、小学校の教師になります。この文章を読んで、小学校教師の社会的使命としてどのようなことが求められていると思いますか、そして、何のために子どもたちに教えますか、あなたの考えを300字以上400字以内で答えなさい。

令和3年度入学試験問題（学校推薦型選抜Ⅱ）

# 小 論 文

（初等教育教員養成課程）

## 注意事項

1. 解答は、すべて別紙解答紙の指定の箇所に横書きで記入すること
2. 解答紙には必ず受験番号を記入すること

【問】 つぎの文章を読み、あとの問いに答えなさい。

シンギュラリティ<sup>②</sup>の到来を論じる人々は、楽観派も悲観派も、人間とコンピュータとが基本的に同質だと信じている。生物と機械とのあいだに原理的な相違は無いと見なすのだ。こうしてマインド・アップローディングだの、不死だのといったビックリ発言があらわれる。

それだけではない。「人間を超えるコンピュータの出現」という発想は、人間の知的能力をバツサリと単純化し、いわば一次元的な物差しの上で、脳とコンピュータとを比較しているのである。たとえば、脳の神経細胞やシナプス結合の数、反応速度などを、コンピュータの記憶容量や論理素子の演算速度などと比べようとする。まるで、異なる機械の処理能力を計量比較するコンテストのようなものだ。

だが、人間の知的能力はもともと柔軟で多次的なものであり、その最大の特長は、状況に応じて臨機応変に問題に対処できることではないだろうか。これに対して機械は、設計された仕様からはみ出せないの、柔軟で多次的な存在ではない。枠組みがキチンと定まらない問題を解くのは苦手なのだ。人工知能の難問である「フレーム問題」は、こういう両者の根本的違いから出てくるのである。だから、「人間を超える」うんぬんという神話は、いわば暗算の速さだけで会社員の人事評価をするような愚行を連想させる。もともと比較不能なものを無理に比較しても、誤解を招くだけだ。

では、生物と機械の間の境界線とはいったい何か？——実はこれが本書をつらぬく基調テーマなのである。

実は、生物と機械のあいだに明確な境界線が引けるといいう有力な学説が存在する。一般論を述べだすと難しくなるので、まず具体的に、コンピュータという機械の特徴から始めよう。コンピュータの内部構造に詳しい読者には退屈かもしれないが、ここを間違えると判断が迷走してしまう（ちなみに近年の若者は「デジタル・ネイティブ」などと呼ばれるが、モバイル機器などの操作にたけているものの、コンピュータの内部機構についてはまったく無関心な人が多いのだ）。

コンピュータはプログラムにもとづいて作動する。プログラムとは、「前もって (pro) 書く (gram)」ということだ。つまり、データを処理する以前に、前もってどのようなデータかを予測し、いかなる論理にしたがってデータを操作するかの手順 (アルゴ

リズム) を、設計者やプログラマが決めておくのである。そして現時点で入力されたデータを手順通りに操作し、結果を出力するわけだが、これがうまく行くのは、過去のプログラム作成時におこった状況予測が当たった時だけである。もし状況が大きく変化すると、コンピュータは操作を停止するか、または、設計者から見てメチャクチャな操作を実行してしまう。

その意味で、コンピュータとは純粹に「過去」にとらわれた存在だ。設計者は過去のデータや処理結果をふまえて論理空間を組み立て、そこで未来のデータ処理方法を決定するのであり、いちいち現時点での判断でデータを処理しているわけではない。人工知能もふくめ、全てのコンピュータ処理は、「過去」によって完全に規定されているのである。コンピュータは、「こうなったら、こうせよ」という過去にあてられた指令を墨守しているだけなのだ。

ビッグデータ時代になって、膨大なデータを扱えるようになっても、この原則は変わらない。いやそれどころか、いっそう「過去」の比重が大きくなったともいえる。ネットのなかには過去のデータが満ちあふれており、それらを見捨てることのできないからである。

一方、人間は、むしろ過去の経験をふまえて行動するとはいうものの、基本的には「現在」の時点で判断しながら生きている。変動する現在の状況にあわせて時々刻々、意思決定を実行しないと生きていけない。前章で、ファストフード店でハンバーガーを買ってくるという子供のお使いが、人工知能ロボットには困難だと述べた。これはフレーム問題の好例である。困難性は、解決のために適用すべき知識群が無限にひろがってしまう点にある。たとえ店への道順を正確に教えておいても、たまたま道路工事をしていればロボットはお手上げになる。詳しい地図データを入力しておけば何とかかなるかもしれないが、それなら、もし店が臨時休業だったらどうなのか。子供はおなかなかがすいているので、別のファストフード店まで行くだろうが、ロボットは普通そこまではやらない。

もし仮に、コンピュータが人間と同様に、現時点での判断にもとづいて臨機応変に処理をおこなうとすれば、その処理速度はたちまち低下する。高速処理能力は、あらかじめ決まった論理空間のなかで作動するという前提に由来している。つまり、コンピュータの融通のきかなさは欠点でなく、本質的な性質なのだ。将棋ソフトウェアが

強いのは、論理空間の大きさが限定されているからである。だが一方、人間の日常生活では論理空間は無量大であり、何が起きるかわからない。

コンピュータにかぎらず、一般に機械とは再現性にもとづく静的な存在である。再現性を失ったら、それは機械でなく廃品だ。これに対して、生物とは、流れ行く時間のなかで状況に対処しつつ、たえず自分を変えながら生きる動的な存在である。この相違は途方もなく大きい。

注) シンギュラリティ・・・人工知能が人類を超える転換点（技術的特異点）。

出典：『ビッグデータと人工知能』 西垣通（著）、2016年 中公新書 pp.104-107

（注釈は出題者によるものである。）

（問1） 下線部「再現性にもとづく静的な存在」とはどのような存在か。40字以内で要約しなさい。

（問2） あなたの考える「小学校におけるコンピュータを活用した教育」の意義について、課題文の内容をふまえて400字以内で述べなさい。